こども・むし

附屬幼稚園　杉山米子

キチ〳〵〳〵、あつと思ふ一瞬、淡い翠の翅を、キラリと秋陽に透きとほらせて、足許からバッタがとぶ。それを見送りながら、とまつた所を見定めて、なるべく靜に其の方へと草叢を分けて行く。と、又一匹、今度は茶と樺色が目をかすめる。オオトだ。私は目指す一匹に手の屆かない所へ逃げられて、ハッと我にかへる。「おや、皆は？」と振返つて見た。自分が餘り蟲から蟲へと熱中して居る間に、いつの間にかあたりが靜になつて居たからだ。だが、振返つた目にうつゝた皆は、云ひ合せた樣に片手に帽子を持つて、片手に封筒を持つて、腰を後へ引いて前の方をみつめながら、眞劍に拔足差足して居る。目指す蟲に近寄れば、サッと右手の帽子を伏せる。次に細心の注意で帽子の中を探ぐる。手につかんだら素早く左手の封筒の中へ入れる。皆無言だ。サッ〳〵と草をわける音だけが聞えて居る。

我を忘れて居るこども、然も熱中して居るこども……こんな、「こどものすがた」を見る時、私は心の底から和やかな喜びに霑ほされるのを覺へる。

× × × × ×

「だつて僕は本で讀みましたよ。生れて來る時に神樣が鈴を一つづつ下さるんだつて……さうして其の鈴は夏や秋だけにしか　いゝ音が出なくて、冬になつて其の鈴が、すつかり鳴らなくなると蟲は死んぢやふんだつて……ちやんと僕讀んだんだもの」「違ふよ君、そりやァ　お話だよ」「お話だつて本當の事なんだよ」「お話は本當の事じやァありませんよ、本當はね、蟲が翅と翅を擦り合せるんですよ……僕はお父樣にちやんと伺つたんだから」

「翅でなんか鳴けないよ、あれは鈴の音ですよ」

「鳴けますよ、そんなら僕のお父樣に聞いてごらん？」

二人ともなか〳〵自信を持つて居るらしく、調子をつけて、語尾を上げて云ひ合つて居る。此處まで聞いて居た私は、そつと氣付かれない樣に二人から遠ざかつた。

こんなにも一生懸命に、自信を持つて云つて居る二人

に、「ごつちが本當のことなの？」と聞かれた時に答へる、言葉を知らなかつたからだ。

× × × × ×

朝陽が部屋に差込んで居るのに、それが却つて爽々しい冷やかさを感じさせる程、涼しい朝だ。

「先生　お早うございます。」

「お早うございます。まあKさんお早いのね、今日は一番よ」

「あのね、先生、K子ちやん家でも一番早かつたのよ」

今朝は、朝からお得意らしいK子さんの顔が輝いて居る。「朝のおはなし」をしながら、花瓶の水を替へる。今水を入れた淡水色の切子グラスのコップの表に、キラ〳〵と水玉がたまつて、秋らしい涼しさ快よさだ。

と、K子さんの不安さうに急き込んだ聲、

「先生　こほろぎは？　此の中に一匹も居ないのよ」

泥と草を入れた飼育鉢、二三日前から、捕まへたこほろぎを入れておくお家だつたそれに、額も鼻の頭も脣も、平におしつける樣にしてのぞいて居たK子さんが云ふ。

「あゝ、こほろぎね、昨日K子さん達がお歸りになつてから、とても弱つて居たから、逃がしたのよ草の中へ、喜んで歸つて行つてよ」「……フーン」

其の何とがつかりした樣なK子さんの聲!!實に千萬無量の思ひが籠つて居る樣だ。逃がした事を不滿に思つて居るのではないのだ。もつと外の響をもつた「フーン」だつた。私はたつた今まで此のK子さんの氣持を考へなかつた自分の輕卒さを、どんなに恥かしく思つた事だらう。一緒に、あんなに一生懸命で捕へた蟲、それを逃がすのに、何故こどもと一緒に逃がさなかつたのだらう。折角捕まへた蟲だから、見て居る前で逃がしたら嘸厭がるだらうと思つたのは、何といふ賢しい考へ違ひであつたらう。勢の弱つた可哀想なこほろぎが、飼育鉢から出て、草叢の中へ、生き返つた樣に、然し、まだ何となくオド〳〵した樣に這込んで行つたあの樣子、そしてあの、何か大變よい事をした樣なあの氣持、それを何故私は子供と一緒に經驗しやうとは考へなかつたのだらう。自分の粗忽な單純さを、ひし〳〵と責められる思ひで、私はK子さんと朝露の多い庭に出た。他のこども達の來る迄に、一匹でも二匹でも、あの飼育鉢にこほろぎを入れて置き度かつたからだ。……それを無心の言葉で教へてくれたK子さんは、もう熱心にシャスターデージーの根株を分けて蟲を探して居る。

× × × × ×

今年も又蟲の多い季節が來た。去年の秋の日記から、いろ〳〵の思ひ出を手操りつゝ、今年も又、思ふ存分「蟲の秋」を樂しみ度いと思つて居る。